

令和元年度(2019年度)高等学校OPENプロジェクト実施報告書(2年次)

研究指定校	北海道余市紅志高等学校	教育局	後志教育局
-------	-------------	-----	-------

1 研究主題	
「農業の高度化・6次産業化への貢献 ～北のフルーツ王国ワイン特区と連携した町づくり～」	
2 研究実践内容	
月	実 施 内 容
H31.4 ～ R2.3	○ 2年次「総合的な学習の時間(みらいの時間)」 基幹産業である果樹栽培と観光資源の現状や活用など、農業・福祉・観光等に係る課題について探究するとともに、研究に係る事業所でインターンシップを行い、課題設定のための調査を実施した。また、調査結果を基に、設定した課題の解決に向けた方策について検討し、さらに理解を深めるため、10月に関西方面の見学旅行を活用した調査を実施した。
R01.6	○ インターンシップに係る課題設定の調査を実施した。
R01.8	○ 北海道大学において、バイオテクノロジーの視点からのブドウ苗木についての学習を行った。
	○ 余市町において、観光調査を実施した。
R1.10	○ 令和元年度第1回地域みらい連携会議を開催した。
	○ 見学旅行において各種調査を実施した。
	○ 全道フォーラムにおいて、中間報告を行った。
R1.12	○ 令和元年度第2回地域みらい連携会議を開催した。当該会議において、研究班5班が研究発表を行うとともに、ワールドカフェ方式で意見交換を行った。
R2.1	
R2.2	○ ウィルスフリーぶどう苗の開発に向けた組織培養及び接ぎ木苗の生産を行った。
	○ 令和元年度第3回地域みらい連携会議を開催した。

3 地域みらい連携会議の開催内容	
第 1 回	令和元年10月11日（金） 16:00～17:00
出席者	小林 国之委員、後藤 英之委員、樋口 知己委員、 濱川 龍一委員、寺井 瞳委員、大下 聡委員
協議内容	・取組の進捗状況の報告 ・全道フォーラムでの発表内容
指導・助言を受けた内容	・アンケート結果とともに実際の具体的な声、意見を取り上げ、生徒が感じたことが分かりやすくなるよう、明確に示すこと。 ・余市町のワイン用ぶどうの生産量が全国的に見ても高いことを提示し、テーマに結び付けること。 ・テーマ「農業の高度化・6次産業化」へのアウトプットをどのように取り組むか具体的な方向性を示すこと。 ・テーマが6次産業化であるため、加工等の2次産業の部分でどう取り組むか検討すること（ワイナリーでの実習など）。 ・各班の研究成果を取り入れて、ワイナリー見学会を開催するなど、最終的に5つの各班の研究結果をどのような形でまとめるかを具体化すること。
第 2 回	令和元年12月6日（金） 13:30～15:30
出席者	後藤 英之委員、樋口 知己委員、濱川 龍一委員、大下 聡委員
協議内容	・各グループ学習の成果発表 ・ワールドカフェ方式のディスカッション
指導・助言を受けた内容	・「農業、観光、交通、多言語、福祉」の各班で設定した課題にしっかり取り組んでおり、成果が見られ良かった。 ・各班の活動の幅が広がっているようであれば、各班が連携し、当初のテーマに沿って、今後の調査研究、成果の取りまとめを進めること。 ・ワインを柱として、ワイナリー、農園等にも関連付けながら各班の調査研究を進めることで、成果のまとめを行うこと。 ・6次産業化に関わる2次産業（加工）については、最終年度に研究に取り入れ、成果を盛り込むこと。

第 3 回	令和 2 年 2 月 19 日 (水) 16:00～17:00
出席者	後藤 英之委員、樋口 知己委員、濱川 龍一委員、 寺井 瞳委員、大下 聡委員、岩田 志織委員
協議内容	・取組の進捗状況の報告 ・次年度以降の取組
指導・助言を受けた内容	・本調査研究を通して生徒のアンケート結果から前向きな回答が増えていることは良い。 ・各班の調査研究の取組は良い内容であるが、テーマとのつながりがはっきりしていないことから、各班の成果とテーマとの結び付きを明確にすること。 ・企業や自治体と連携してワインツーリズムの形態で各班の成果を結び付けるという発想は良いので、生徒の活動等、実際の運営面を細かく検討すること。 ・シンポジウムを開催し、その内容を自治体や町民に提言するなど、本研究調査をどのような形でまとめるかを検討すること。
4 研究の成果と課題	
(1) 目的の達成状況 ○ 実践研究において、地域の観光スポット発掘のための調査や、果樹園を利用した町との連携によるノーマライゼーション導入の検討調査等を通して、地域課題の解決を図るため、地域と連携し活性化に向けて活動することができた。 ○ 実践研究を通して「地域の課題に理解が深まったか」とのアンケート結果では、「そう思う、だいたいそう思う」と答えた生徒は、4月の62%から12月には83%に上昇するなど、本研究を通して、地域に対する生徒の理解を深めることができた。 (2) 目標の達成状況 ○ 10月に実施した関西方面での調査活動や12月に開催した第2回地域みらい連携会議における活動後に実施したアンケートでは次のとおりの結果となった。 ・地域課題への理解が深まったか 「とてもそう思う」「だいたいそう思う」と回答した生徒の割合…83% ・地元に興味関心が高まったか 「とてもそう思う」「だいたいそう思う」と回答した生徒の割合…77% ・自分の将来に役立つ取組と思ったか 「とてもそう思う」「だいたいそう思う」と回答した生徒の割合…71% ・地域社会や専門機関への訪問を通じて興味・関心が高まったか 「とてもそう思う」「だいたいそう思う」と回答した生徒の割合…77%	

いずれの項目についても、継続的な取組を通して、生徒の学びが深まり、意識の向上につながったと考えられる。

- 第2回地域みらい連携会議において、各班の代表生徒が当該会議の構成員に活動報告を行うとともに、ワールドカフェ方式で全委員と全生徒が意見交換を行い、委員から多くのアドバイスや助言、励ましの言葉をいただくことで、生徒は地域社会の一員として、課題の発見・解決を図る意識を高めるきっかけをもつことができた。

(3) 実践研究の規模

- 2年次生を中心に、各教科と連携を図り、全校規模で実施した。
- 今年度の取組は、2年次を中心とした取組であったことから、今後は全年次を通した取組とするため、1年次における「産業社会と人間」、2、3年次における「総合的な探究の時間」を中心とした全体計画を作成するとともに円滑な実施に向けた校内体制を確立することが課題である。

(4) 研究成果の普及

- 研究内容や成果を新聞社に情報提供することにより、新聞の紙面を通して、地域に広く周知することができた。

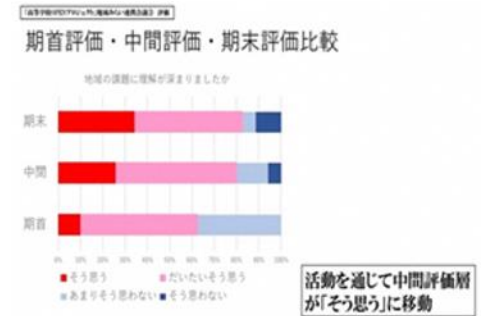
(5) 実践研究内容

- 第2回地域みらい連携会議における生徒による活動報告に向けた準備
活動報告後に実施した生徒向けアンケートの「地元への興味関心が高まりましたか」という設問では、「とてもそう思う」「だいたいそう思う」と回答する生徒が年度当初の55%から77%に向上するなど、生徒の地域への関心を高めることができた。
- 第2回地域みらい連携会議における生徒による活動報告
参加生徒全員が各委員の前で発表し、その後、ワールドカフェ方式での意見交換を行うことにより、生徒はこれまでの取組や今後の調査活動等の進め方に対する課題やアイデア等について直接各委員から指導・助言をいただくことができた。

(6) 地域みらい連携会議

- 実態把握するための調査方法や今後のテーマに沿った調査研究の在り方、まとめの方向性について助言を得ることができ、調査、研究の修正を図ることができた。
- 会議の開催時期について、調査研究の進捗と成果を踏まえた上で会議を開催できるよう、日程を調整する必要がある。

5 プロジェクトの達成状況	
(1) 〔評価の観点〕 本道の基幹産業を支える人材や、地域を守り支えていく人材の育成について	
(評価) 一部の生徒に対しては、本道の基幹産業や地域を支える人材の育成につながった取組となった。 (評価した理由) 地域の農業、観光、福祉の課題について余市町と都市部の比較調査等を実施し、地域産業に対する理解を深め、担い手としての自覚を持つ生徒が増加していることが、アンケート結果から認められたため。	
(2) 〔評価の観点〕 地域の自治体や企業、産業界等の関係機関との協働について	
(評価) 地域の自治体や企業、産業界等の関係機関と協働した取組を実施したが、課題や成果の共有には至っていない。 (評価した理由) 余市町や各大学、地域企業からの指導・助言を生かし、活動に取り組むことができた。しかし、課題解決に向けた本格的な取組について、課題の共有はなされているが、成果の共有までには至ってないため。	
(3) 〔評価の観点〕 生徒の主体性について	
(評価) 生徒は、指示の範囲で主体性を持って取り組むことができている。 (理由) 地域課題設定とその検証に多くの時間をかけているため、地域課題について「自分達の立場でできることは何か」を考えながら取り組もうとするが、どのように取り組めば良いかが分からない状況であるため、指示された範囲でできることを模索しながら取り組むといった状況にあるため。	
(4) 〔評価の観点〕 地域課題の解決状況について	
(評価) 地域課題を把握し、取り組んだだけに留まっている。 (理由) 当初計画では、1年次「地域の現状把握と課題設定」、2年次「課題の検証と解決方法検討」、3年次「課題解決の実践と検証」としているが、今年度は昨年度設定した課題（5つの小テーマ）について検証し、課題解決のための方策について各班が様々な角度から検討を行なっているため。	

6 今後の取組	
	○ 今年度は小テーマ班毎に「課題検証と解決方法検討」の活動が中心だったため、各班の課題解決の目処が立ちつつあるが、研究主題にどのように結びつけていくかが課題となった。各班の集大成として「ワインツーリズム」が実施できるよう、運営指導委員会等からツアー等の運営ノウハウを持つ企業や関係機関等を紹介していただき連携先の確保を図るとともに、指導・助言を踏まえた検討を行う。
7 参考資料	
	(1) 見学旅行（関西方面）で実施した調査  関西圏（都市部）のワイン消費者調査、バリアフリー調査、交通調査、観光目的調査、多言語化調査を行なった。（写真はワイン消費者調査のうち、京都市のワイン専門店エーデルヴァインでの聞き取り調査の様子。） (2) 期首評価・中間評価・期末評価の推移（一部抜粋）  「地元への興味が高まりましたか」の設問に対して「そう思う」「だいたいそう思う」と肯定的な回答をした生徒の割合について、期首評価では約50%だったが、期末評価では約80%に上昇した。 (3) ブドウ苗無菌培養バイオ技術「北海道新聞」（令和2年2月8日）  町内の「北方ベリー研究所」佐藤代表から果物の茎の生長点が無菌培養し健全な苗を作るバイオ技術を学んでいる様子。 ※ クリーンベンチ内で顕微鏡を用いた細かな作業が求められる。